

東門(とうもん)

元興寺は 1200 年以上の歴史があるが、この門が寺の正門となったのはここ 5 世紀ほどのことである。この門は、15 世紀の浄土真宗の流行に合わせて、伽藍配置が変化したことを示している。

500 年以上前から、元興寺の表門（正門）は南側にあった。日本の古い寺院の配置は、南を吉方位とする中国の地占いの影響を受けていることが多い。しかし、1244 年に極楽堂が建立されると、伽藍の正門を東向きに変更した。これは、浄土真宗の流行に対応するためである。

日本の中世は、社会不安が蔓延していた時代であった。浄土真宗は、飢饉や疫病などの混乱に苦しむ人々に、極楽往生をもたらすという考え方で、人々の心を癒した。それまで仏教は主にエリート層が信仰していたが、この時代には庶民の間にも広まった。

浄土信仰では、西は阿弥陀仏の浄土の方角であり、生きとし生けるものが悟りを開くことができるのかな世界である。東から元興寺に入った人は、智光の「浄土曼荼羅」が描かれた極楽堂の前で、自然と西を向くことになる。この方位は、参詣者が浄土へ向かって進んでいることを実感させるものであった。南から東への配置変更は、王朝の庇護がなくなった後も、浄土信仰者の支援によって寺が機能していたことを示すものである。

1411 年、東大寺の西南院の門が元興寺に移築された。この門は鎌倉時代のもので、当時の建築

の典型的な例である。門は幅 1 間（約 1.8 メートル）、2 本の支柱と 4 本の脇柱で構成されてい

る。四脚門（しきゃくもん）と呼ばれるこのデザインは、一般的に通用門ではなく表門に用いられる。